

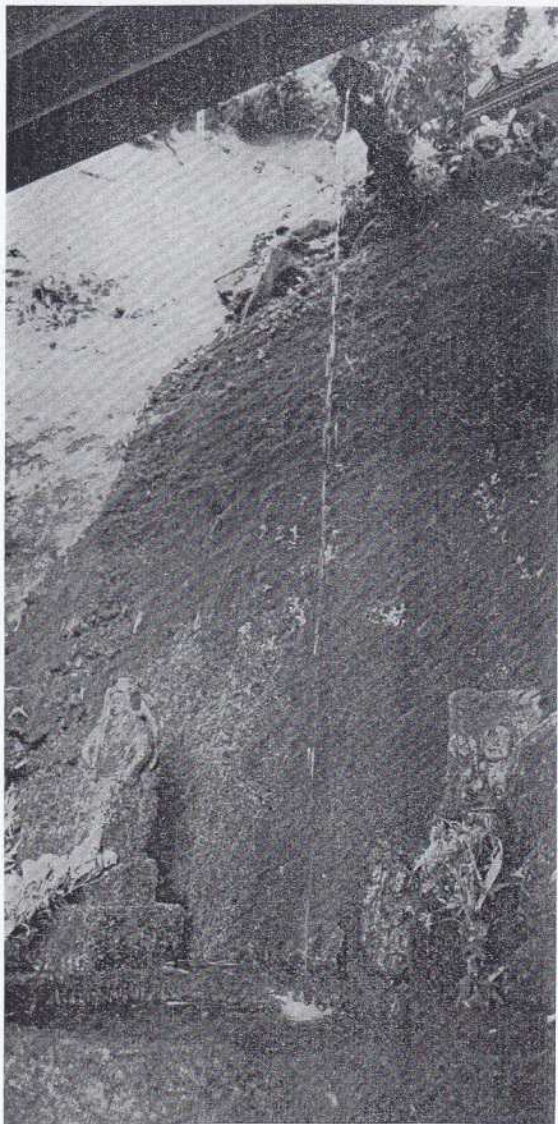
祀らざなくても、すでに川にはそれだけの霊力を有しているのである。

青年の話にもどそう。能登川付近の話に關心を示したのは私だけだったが、その場には彼の仲間が数名いた。「少し胸が痛い」とい

いながらゆっくり語る彼の話に多大な興味を抱いた私は、何かの機会に能登川の群衆に参列させてもらおう約束を取りつけた。人の悲しみの場に、覚めた目をしたものが混じるのは不自然さあまりないし、その場にいる自分かと思うといたたまれなくなる。しかし、どこかでそのいたたまれなさを断ち切らない限り、関心を持ってしまった者は「業だなア」と思

いながらも、心理的空腹感を抱き続けねばならない。
能登川の群衆を目のあたりにしたのは、彼の話を聞いてから四ヵ月たった十一月のことであった。私に話をした頃、彼は既にガンにおかされていて、九月、医者に見せた時にはもう手遅れの状態だった。まもなくある大

学病院で彼は亡くなり、彼の仲間や、彼の愛



した女性らと共に野辺に送ったのは、雪こそ降っていなかったが、曇天の寒い日であった。仲間の一人が何か話さなくてはと思ったのだからか「彼が死んで、自分で西山さんに見せてくれてシヤねえ」——三十三年、一人でないけれども彼の土中の住み家は、思つたより大きく深く深かった。座つた姿勢で埋められていく棺に、土がかぶせられ、樹皮に着く頃、川を琵琶湖にむかつて流れていく彼の姿を想つた。三、四年たてば土が落ち込み仏になるのだという。

水に宿る霊力

水の霊力が勝れて大きいと考えられ、水に対する信仰が深いのは、通常の死以上に災いをもたらすと考えられてきた、不幸な死に方をした者に対して水をもちて対処する例が多いことである。たとえは産死者の追善として行う「流れ灌頂」では、小川の辺りで竹に布を張り、碁婆を立て、道行く人に水をかけてもらつたり、灌頂桶を川や海に流したりする。

滋賀県の報告では、母子とも亡くなった場合、川の中に繩を結びつけた卒塔婆をたて、村の女性達が繩を洗つてやるのだという。ここには災いに対する恐れと共に、産死者が地獄の血の池へいくのを救おうとする願ひもこめられている。白山でも、産死者が白山の血の池へ行くという伝承があった。

水をもつて汚れを払い、身を清める風習は

特別な例をあげなくてもどこにでもみられる。宮には「洗心」と書かれた手水鉢がおかれているし、御手洗や御手洗川もある。江戸期の文獻である「塩尻」によれば、巫女が白と赤の服装をまといているのは、水の白、火の赤で身を清めた姿で神につかえていることを意味しているのだそうだ。

もともと、汚れを清め、村落を災厄から守る役割を担ってきた水は、それ自身が延命の薬であつたり、病気を治す靈水としての役割も果すようになる。珠洲市清水町の「義経の割り石」と呼ばれる石の上にたまつた水は、どんな日照りの時でも乾くことなく、眼病に効き目があつたというし、薬師如来を祀つているところには必ずとつていい程、薬水があり、様々な病気に効力をあらわしている。東大寺お水取りの香水も諸病平癒の効験があるとされ、宮の手水も大抵は諸病に効くとされる。

万葉集、大伴家持の歌に「いもにあはずひさしくなりぬにぎし川 きよき瀬」とにみならはへてな」と門前町仁岸川の清き瀬ごとの「水占」が記されている。ここには水そのものに、ものを占う神秘力があると考えられていたことが示されていて、水に靈力を認めている古い例である。妹(恋人)の面影を瀬に写し出すよりな古いを試みたのかも知れない。

水であるから火事には滅法強く、屋根に色

違いの瓦で「水」の文字を表わしたり、土蔵等に「水」の文字が記されてある例は、県内でも注意してみればいくつでも見出せるに違いない。珠洲市宝立町宗玄で度々火災に遭つた家を気の毒に思つた弘法大師が「霏柱水の梁に雪の析さす積までも水垂木かな」という歌を与えたところ、それ以来その家は火災にあわず、はつた柱を削り持つていれば病氣にかからないといわれていたのも、弘法大師もさることながら、歌がまたよかつたのである。

水の威力に対する信仰が、もつとも強くあらわれているのは滝である。正月の若水が井戸あるいは川から水神を祀つて汲みあげ、その水で大服茶を飲むのは、生命力の更新(若返り)を意図してのことだが、滝には「養老の滝」にまつわる話が古く「扶桑略記」に載つており、そこでは白髪が黒々とした髪に変わるほどの験をあらわした、という話になっている。この滝のもつ生命力が、大日如来の印である智拳印を結び、靈場を巡り、いったん死んで再生してくる(擬死再生)流行

によつて験力を身につけようとする験者たち、格好の修行の場としてとらえられたのは当然のことであつた。修験靈場として名高い熊野の飛瀧神社は滝そのものが御神体となつていくくらいである。

生産の基盤である農業にとつて水は生き死にに関わる問題としてあつたけれど、祈雨、止雨を祈願するのは竜神を祀る川辺の宮や、

- 写真① 鳥取県東郷池
この川に遺骨、灰を流す
写真② 三途の川で着物をはぐという脱衣姿
写真③ サイの河原
写真④ 東郷池(貴)
鼓を運んでいた舟

滝であった。またそれをつかさどるのが修験者で、彼等修験者の象徴として、また水とは切り離せない人物として、弘法大師がいた。大師は「弘法清水」と呼ばれる水にまつわる様々な伝承を残して「押水」のように地名となつて足跡をとどめていたり、珠洲地方でも六例の弘法清水伝説を残している。その弘法大師が修行した滝と伝えられる「日字の滝」「加護の滝」と呼ばれる滝が、珠洲市宝立町真言宗法住寺の旧寺城北端、加護地内にある。その川を般若川といひ、川の流れの音が般若経を誦す声になつていたといふ。

原初的で雑多な信仰

最後に鶴米町にある「歌占の滝」について少し触れ、水と信仰の話を終わりにしたい。この「歌占の滝」の話は謡曲四番目物「歌占」として広く紹介されていた時期があった。「伊勢参宮名所図会」巻下に載る絵によると、苦むした岩に坐つて、和歌を書いた八枚の短冊を結びつけた弓を持つ翁に、三人の従者を連れた幸菊丸が語りかけている、という構図になつてゐる。和歌のうち六首は出典が明らかかなものであるが、「歌占」に利用される和歌は典拠不明のものである。幸菊丸が父の安否を尋ねた時、答へとして用意された和歌が「北は黄に南は青く東白西くれなるのそめいろの山」というので、翁はこの歌から、よくいえば懸け詞を利用し「父の病は重いけれど、そめいろ（蘇命語）であるから直る」という古い占いを導き出す。さらに翁と幸菊丸が

夫は親子であることを認めあう劇的な場面のきつかけとなる歌が「鶯のかひこの中のほととぎすしが父にてしが父にあらず」という父なのか父でないのか、わかつたようなわからぬ歌である。

ともかく、これほどうまく事が運ぶには、どこにでもあるような背景では駄目なことは明らかで、滝という信仰の対象となる霊地が介在して、はじめて納得がいくのである。

水に関する信仰は、一つの教義や一派の枠内でとらえることが不可能なくらい、雑多な形で人々の中に生きつづけてきた。しかも、理論では説明のつかぬ部分、いわば、私達が存在しているといふ、その根源的なものの中にありつづけるのだともいふ。いいかえれば、原初的すぎるためにかえつてみえてこないといふことにもつながるのであろう。

七月・八月は新旧の滝はあつても益といふ、古くからの年中行事をむかへる月である。おのずから、先祖のことや自分達の牛が話題にのぼる頃でもある。水道をひねればどこからでも流れてくる水を、敬虔な気持ちでとらえることは難かしいことなのかもしれない。しかし、時には身近なものの中に、思いを馳せてみるのもいいではないか。年中行事の持つ意義はそんなところにもあるのだから。

久しぶりにとりだした、彼の仲間達が編んだ遺稿集を前にして、今、そんなことを思つてゐる。

